

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：32615

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820040

研究課題名(和文) タイ南部の大規模災害後のコミュニティ自立再生と癒しの過程に関する研究

研究課題名(英文) A study on healing the soul and reconstruction of community from damages by the Sumatra Earthquake in Southern Thailand

研究代表者

西田 昌之(NISHIDA, Masayuki)

国際基督教大学・アジア文化研究所・研究員

研究者番号：40636809

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はタイ南部バンガー県タクワパー郡ナムケム村と周辺被災者住宅で、スマトラ沖地震9年後のコミュニティ再生について聞き取り調査を行った。本研究は、津波被災から復興までサイクル、鎮魂の癒しと儀礼、個々の構成員の癒しの多様性、外部アクターとのかかわりの4点について調査を行った。その結果、災害ボランティア等の制度化が進んだナムケム村村民と生活再建が遅れた周辺被災者住宅に滞留する被災者との間に再生と癒しの過程で格差が見られた。

更に本研究はタイと日本の学会で結果発表を行った。その一環として2013年12月19-23日東京で研究報告会として日タイの津波経験を繋ぐ企画展示を開催し、社会還元を行った。

研究成果の概要(英文)：Research on reconstruction of communities nine years after the Sumatra Earthquake was conducted in Nam Khem village and neighboring victims' resettlement areas in Takhuapa district, Phangng a Province. This research focused on following four points: 1) reconstruction cycle from tsunami suffering to recovery 2) the process of healing souls of tsunami victims 3) diversity of healing among individual victims, and 4) relationships with external actors. As a result, this research found a large gap in life reconstruction process, between villagers in Nam Khem, who installed disaster volunteering system, and villagers in neighboring resettlement areas, who were left behind by reconstruction project. Furthermore, the results of this research were reported in Thailand and Japan. During the period of 19-23 December, 2013, an exhibition on tsunami experiences in Thailand and Japan was held in Tokyo on the base of this research.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学 災害 タイ南部 スマトラ沖地震 コミュニティ防災 災害文化

## 1. 研究開始当初の背景

2011年3月11日の東日本大震災とそれに伴う津波は日本で未曾有の被害をもたらすことになった。この震災経験を生かし、世界中で大規模災害をもたらす悲しい経験を減らしていくために国際災害協力の機運が高まっている。日本において災害に関する自然科学や工学的な研究は積極的に行われている一方で、社会科学的研究はまだ始まったばかりである。

異なった文化、社会組織の中で災害支援、国際協力を行う上で、政府やコミュニティが災害時にどのような対応をするのかを理解することは重要な点の一つである。

そのため、本研究ではスマトラ沖地震による津波被災地の一つであるタイ南部の集落で長期の聞き取り調査を行い、被災から復興までの一貫したデータを収集することによって、現地的心情と慣習、信仰に根差したコミュニティ復興の過程を調査することを目的とした。

タイでは、気候変動や生活様式の変化に伴い、自然、人為災害による被害が増加している。政府では大規模災害に対応するために防災、緊急対応、復興のためのインフラ、社会システムの整備を進めている。

調査地となったパンガー県ナムケム村は津波による大被害から復興を遂げ、ボランティアによる防災活動組織をコミュニティに定着させたコミュニティ防災の村として注目を集めるようになってきている。ナムケム村民間災害ボランティア団は、その防災活動に関して政府から表彰を受け、タイを代表するコミュニティ防災モデルとしてさまざまな地域での講演や防災活動を開始している。まさにナムケム村は、タイを代表する津波被災地から、防災支援の拠点に姿を変えることになったのである。

スマトラ沖地震及び津波のタイ社会への影響については、津波発生直後から多くの研究者やNGOが現地に入り研究が行われた。社会科学の分野においては、東京大学の佐藤仁(2008)が、アンダマン海沿岸の津波後の土地問題に関する研究を行い、コミュニティと外部組織との新しい連帯の構築について発表している。また、人類学の視点から鈴木祐樹(2011)、ナルモン(2008)による海洋民モーケン集落への影響の調査、小川久志(2011)によってムスリム集落の津波言説の研究も行われている。またタイの学術文献ではチュラロンコーン大学のいくつかのグループが調査を行っており、同大社会科学研究所スリチャイ・ワンゲーオらのグループによって津波支援の課題を多角的に分析した研究集として「津波の社会学」(Surichai et al. 2011)が刊行されている。また同研究所では女性、マイノリティ集団の聞き取り調査も行っている(Chulalongkorn University Social Research Institute 2007)。

本研究の調査地であるパンガー県ナムケム村は、プーケットから90kmほど北にある村落であり、公式にはパンガー県タクワパー郡タムボン・バーンムアン第2集落である(図1)。本地域は、スマトラ沖地震時には5mほどの津波が押し寄せ、ほぼ全集落域が被災した。その人的被害は公式には死者824人、実際には1500人ともいわれている。物的被害としては海岸部の家屋はほぼ全壊したといわれている。その後被災者は近隣の避難所で数か月から1年に及ぶ避難所での生活を送った後で、住宅・産業再建を行い、現在に至っている。

現在、村の人口は4000人ほどで、住民の多数派はタイ仏教徒である。そのほとんどの住人は1980年代に村が海中錫鉱山として栄えたころに、タイ各地から集まってきた労働者とその子孫である。この村の原住民は海洋民モーケンであるが、現在、人口は100名ほどと少数派になっている。また住民の3分の1は漁業やリゾート産業で働くためにやってきたビルマ人労働者となっている。ムスリム住民は村内でほとんど見つけることはできない。



図1 ナムケム村とその周辺

村の主要産業は漁業と観光産業である。まず村の北側には漁船のための埠頭や棧橋が並んでいる。埠頭には荷揚げ場、魚の買取場、網の修理場として使われており、小型の漁船が停泊している。漁船の所有者の多くはタイ人で、ビルマ人が網漁の労働者として雇われている。また西の運河沿いには、造船工場のドックがあり、小型船舶が停泊している。さらに村の中には水産加工場も3カ所ほどあり、魚のすり身や魚粉、干し魚の製造し、プーケットなどの消費地へ出荷している。

農業は村南部の一部で行われ、主にゴム、

カシューナッツ、油やし、トウガラシなどが生産されているが、規模は小さい。村の周辺の土地の多くは錫鉱山開発の中で表土がはぎとられてしまったために農業に適さない。

また村の若者の中には観光業に従事しているものが多い。ナムケム村にはリゾートは数軒ほどしかないが、カオラックやコーカーオ島などの近隣のリゾートに通ってホテルの従業員、コック、ツアーガイドなどに従事している。

津波後のバーナムケム村の住宅再建は主に三つの様式で行われた。1) 村内の元の居住地での再建、2) 村内の高台での移転、3) 村落外の再定住地 (ITV バーナムアン集落、プッティアウ集落など) への移転である。郡以外に移住していった人もいるが今回追跡調査は行えなかった。

## 2. 研究の目的

本研究では、スマトラ沖地震に伴う津波で被災した南タイの地域コミュニティで聞き取り調査を行い、コミュニティが災害に伴う日常生活の動乱からどのような日常性を回復させ、自律再生を果たしていったのかについて考察した。

二年間の本研究期間を通じて、南タイアンダマン海沿岸に位置するナムケム村を中心とした平地タイ民族の集落で住み込み調査を行った。次の4点の事項の調査を行った(図2)。

1. 被災コミュニティの被災から復興までのサイクルを記録保存する。
2. 被災コミュニティの鎮魂と癒しの儀礼 (埋葬儀礼・追悼・追善供養・タンブンなど) 言説を明らかにする。
3. 個々の家庭の日々の生活のなかの多様な鎮魂、コミュニティ再生のあり方を明らかにする。
4. 外部アクターとの協働とかかわり方を考察する。

以上の4点の調査を行うことで、**被災コミュニティの自立再生と癒しの過程**を明らかにすることを目的とした。

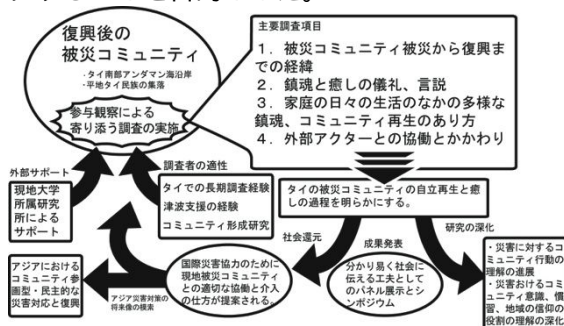


図2 本研究の目標概念図

## 3. 研究の方法

本研究では以下のような方法で調査を行った。

(1)バンコク・チュラーロンコーン大学政治学部の客員研究員として、チュラーロンコー

ン大学の所有する調査報告書、論文等の文献調査を行った。また被災地で調査を実施している社会科学研究所の研究員・教員から意見交換、情報収集をした。

(2)パンガー県タクワパー郡タムボン・バーナムアン、ナムケム村と周辺に作られた被災者再定住地域に2012年12月26日から2月26日まで、2013年6月30日から8月1日までの3か月間住み込み、約150世帯に津波前後の家族・生業の状況、津波被災の状況、避難の状況、現在の状況、津波への恐怖、コミュニティ防災の信用性についての質問を行った。

(3)パンガー県鉱山局、パンガー県タクワパー郡役場、タムボン行政体などから、村史および被災時の基礎資料を収集した。

その中で上記の課題に答えるために2つのアプローチを採用した。

### アプローチ 災害文化

災害文化というと一般的に災害を防ぐための古い伝統的な慣習や知識をイメージすることが多い。しかし、本研究ではコミュニティ再建、統合の結節点としてナムケム村が行っていった災害文化の創造の動きに着目をした。

タイにおける津波に関する伝統的な災害文化の欠如については、津波という用語自体が2004年スマトラ沖地震前後に、日本語とその翻訳語である英語のツナミス (Tsunamis) からタイ語として普及した言葉であるという点からも指摘されている。スマトラ沖地震による津波被災以前のタイ語における表現は、大きな波を意味するクルン・ヤックと呼ばれる言葉はあったが、津波自体に対する特別な語彙を持たなかった。実際のインド洋大津波の発生時に、南部カオラックには津波が早い時間に到達し、被災したホテル従業員たちがまだ津波の到達していない場所に電話で警告を發した。しかし、その時住民に津波の概念はなく、海浜部の洪水として伝えられ、住民の退避は行われなかったといわれている。用語がないということからも当時パンガー県の住民およびタイ国民にとって津波という災害が理解辛いものであったことがわかる。

しかし、タイ民族以外に目を向けた時、スマトラ沖地震の際に津波に関する知識と適切な反応を伝承から継承していた民族事例がいくつか報告されている。特に同じパンガー県スリン諸島の海洋民モーケン人々の語りにについては特に有名である (Narumon 2008、鈴木 2011)。災害文化の研究は、伝統知やローカルノレッジの観点から、災害に関する古い言い伝えや慣習的な行動を促す災害文化に焦点を与えている研究が多い。しかし、本研究では、災害文化の創造というコミュニティのプロジェクトと近代科学とシステムの利用という現在性を付与して、改めて災害文化を問い直す必要があることを提起した。

2012年12月26日のバーナムケム津波メモリアル公園で開催された第八回津波被災者追悼記念式典でインラック首相からの手紙が読み上げられたがその文章で災害文化への言及がある。

「現在タイ政府は自然災害や、交通事故のような人為災害など様々な災害に直面している。政府ではこれら災害に関して国民の啓蒙を図り、さまざまな形で防災の努力を行っている。それはつまり、防災の意識と文化を醸成することであり、すべての分野の人々が誠心誠意、協力し合って、家庭、組織の中に根付かせ、さらにはコミュニティ、政府、マスコミに広げて行く。こういった行いにより、安定した国家運営の可能性を拓いてゆく。」

この文脈における防災の意識と文化は決して伝統知のみを意味していないことが分かるであろう。災害と文化の問題は、タイにとって伝統と現代性を包含した複雑な問題となっている。そのため災害文化はより広義に想定する必要がある。つまり「津波」というシンボルに理解し、同一集団内での解釈と態度、行動を発展させ、それを継承していくプロセスを作り上げていく過程こそが、災害文化形成の過程と言える。その対応が伝統的知識によるものであろうと、現代的知識によるものであろうと問題にはならない。災害文化は日常生活の中でパターン化された災害に対する解釈と対応そしてその継承の体系なのである。

#### アプローチ 生活再建の格差

被災地での聞き取りを続ける中で、津波被害からの個々の生活再建のサイクル及び癒しに関わる語り、居住地、被災の状況によって異なって来ることがわかってきた。そこで二年目の調査のアプローチとして、再定住地域に集中した聞き取りと、被災地と再定住地域の比較を行った。

再定住地域二カ所では、もちろん生活再建に成功した世帯もいるが、土地問題や被災条件など様々な問題からナムケム村に戻ることのできなかったり、生活再建に失敗して被災後改めて入居したりした貧困世帯が数多く滞留しており、生活再建が進まず貧困の罠の中に陥ってしまっている。貧困世帯の人々の間では、津波救済の不平等な取り扱いに対する怨嗟の感情を共有することによって日々の癒しとしている面も見受けられる。

今なお様々な被災者支援プログラムが実行され、災害文化の形成の中心となっているナムケム村と比較して、再定住地域の災害に対する価値の形成、および受容はまた異なる形態があることが示唆され研究を行っている。現在のところまでの研究では村民たちの生活再建の成功者と失敗者のモデルを提示するとともに、その明暗を分けた要因として、

資産、被災状況、支援認定、地域政治の4要因から検証を行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) 災害文化形成によるコミュニティ統合

ナムケム村は災害文化の創造によってコミュニティ再建、統合を果たしていった動きが観察された。ナムケム村にとって災害文化とは、津波をシンボルとして掲げ、津波の被災と復興記憶と経験の継承と再生産を中心にコミュニティの結束させる重要な概念体系である。ナムケム村は津波記念公園や野外博物館などのインフラを設置し、さらに津波追悼行事などをもともとその地域にあった年間行事や、タンブンなどといった伝統慣習の中に組み込みことで日常生活の中で定着を図っていった。

さらにナムケム村にとって特徴的であったのは、津波の被災経験や国内外のボランティアと協働して行った復興の記憶を利用しつつ、防災に対するコミュニティ活動と防災ボランティアへの積極的な参加を生み出していった点である。この活動は村域を越えてバンコクの水害支援などにも参加するほどに成長している。ボランティア参加者の動機は津波で失ったものへの悔恨とコミュニティへの貢献などさまざまである。しかし、この防災ボランティアの防災活動への参加と共働という協働行為によって、つねにコミュニティにあたらしい災害の記憶と防災の重要性を村に植え付け、コミュニティ結束の動機として循環している。津波は今後、数十年起こらないかもしれない。しかし、ナムケム村のボランティアが他所の被災地に災害支援に行くことによって、防災の技術と意識は常にナムケム村の中に保たれることになるのである。それによりコミュニティ内での記憶の風化は防がれることになるのである。

さらにナムケム村は、政府との関係を常に適切なバランスを維持している。政府にとってはナムケム村の活動は、政府のコミュニティ防災を体現するモデルケースである。政府はナムケム村の防災活動を支持、賞賛し、多くの注目を与えている。地域住民もそれに価値を見出し、防災活動への参加は地域の誇りとなっている。しかし、ナムケム村の活動動機は、国家や国民に対する貢献という枠組みで行われているものではなく、ナムケム村の共同記憶と体験によるものである。つまり、ナムケム村は政府の目的と自村の目的を適切に「ずらす」ことによってお互いに利益のあるバランスを生み出しているのである。

ナムケム村の人々にとって津波は多くの家族親類の命と財産を奪った元凶であった。しかし9年過ぎ、津波は奇妙にも共同体の復興の中で住民コミュニティの統合の象徴に変化した。そして今や津波防災を中心とした新しい公共性をもつ災害文化コミュニティが生まれているのである。

## (2)生活再建の格差

再定住地域二カ所で聞き取りを通じて、村民たちの生活再建の成功者と失敗者のモデルを提示するとともに、その明暗を分けた要因として、資産、被災状況、支援認定、地域政治の4要因から検証を行った。

復興住宅における成功者のモデルはある程度の復興が成し遂げられ、収入が安定した後で、復興住宅を売却・賃貸にして他地域への移転、もしくは復興住宅地内で家屋の拡張、商店を運営するものが見られる。

他方、復興住宅では荒廃した住宅も数多くみられ、復興住宅からの売却および放棄高齢世帯、母子世帯などの貧困の中に停滞被災者認定を受けられなかった貧困被災民の借家住まいの状況が見られる。

復興住宅内で格差が開いてしまった要因として、まずもともとの資産の多寡があげられる。津波の前に土地や銀行資産を持っていたのか、また保有船舶などの正式な登録、納税をしていたかによって補償や復興の仕方が異なる。次に被災状況であるが、津波によって多くの家族を失い、女性・子供のみや老人世帯となってしまった家庭は生活再建からは遠のいた。また被災者認定に関して、国民証や土地の権利を保持し、持ち家を被災したものが正当な被支援者として優先的に支援が分配された。最後に地域政治に関しては、地域のリーダー層に血縁や地縁を持つ者に支援、住宅等の分配が重点的に行われることになった。

被災者の格差問題は必ず発生する問題であり、被災一定期間後の被災住民の実態把握と格差是正のための仕組み作りが必要である。その際には被災者支援としてではなく、より広範な格差是正の社会福祉政策の一環として母子世帯および高齢者世帯を中心とした所得向上支援が望まれる。

## (3)企画展示を利用した成果報告

2013年12月19日から23日まで、三鷹市と国際基督教大学アジア文化研究所の後援によりアート学術融合展『津波の後、語り継ぐもの タイ9年日本3年』を開催。調査研究に交流したタイと日本の若手研究者、写真家、アーティストで集まり、1年かけて展示準備を行った。5日間で延べ251名が来場した。会期中には二回のギャラリートークとギャラリーツアーを開催し、市民の方々と参加アーティストと国際基督教大学の若手研究者との交流を行った。さらに日本社会事業大学(東京都清瀬市)と協力して手話による展示案内も同時に行った。

災害研究に関する関心を日本とタイで喚起しつつ、楽しみながら研究の成果報告を行えるという点で非常に有意義であった。しかし、長期に渡り企画展示が可能な施設を確保できなかったため、効果は限定的であった。

## <参考文献>

・小川久志「宗教実践にみるインド洋津波災害--タイ南部ムスリム村落における津波災害とグローバル化の一断面」『総特集：災害と地域研究』『地域研究』Vol 11.No.2, 京都大学地域研究統合情報センター 2011年 p119-138

・佐藤仁「タイ津波被災地のモラル・エコノミー」『市民社会』竹中千春 他編 慶応大学出版会 2008年 p361-378

・鈴木祐記「創られた災害 洪水神話から出来事としての津波へ」『総特集：災害と地域研究』『地域研究』Vol 11.No.2, 京都大学地域研究統合情報センター 2011年 p139-160

・Chulalongkorn University Social Research Institute, *Final Report: Violence Against Woman in Thailand Post-Tsunami Context* (Bangkok: Chulalongkorn University Social Research Institute, 2007).

・Narumon Arunotai, "Saved by an old legend and a keen observation: the case of Moken sea nomads in Thailand," in *Indigenous Knowledge for Disaster Risk Reduction-Good Practices and Lessons Learned from Experiences in the Asia-Pacific Region* (Bangkok: UN/ISDR Asia and Pacific, 2008), 73-78.

・Surichai Wankaeu et al., *Sociology of Tsunami Cooperation for Disaster Prevention [Sangkhomwithaya Suenami-kanrapmue kanphaiphibat]*, (Bangkok: Chulalongkorn University, 2007).

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

Masayuki Nishida 'Creating Disaster Culture-A Case of Nam Khem Village in Southern Thailand'. 2014. *Asian Cultural Studies* vol. 40. 査読有 (掲載決定)

西田 昌之「タイ国タクワパー郡バーナムケムのコミュニティ防災」『なじまあ』4号 査読無 pp.7 立教大学アジア地域研究所 2014年3月

〔学会発表〕(計6件)

西田 昌之「津波復興住宅における生活再建の格差 - タイ国パンガー県タクワパー郡の事例 - 」政治社会学会(ASPOS) 第4回総会及び研究大会 千里金蘭大学 2013

年 11 月 17 日

西田 昌之「災害文化を創り出す スマトラ沖地震後のコミュニティ防災の試みと課題」第 96 回現代人類学研究会 東京大学駒場キャンパス 2013 年 11 月 9 日

Masayuki Nishida "Creating Disaster Culture-A Case of Nam Khem Village in Southern Thailand" International Conference Thai Studies through the East Wind in Chiang Mai, Thailand. August 24-25, 2013.

Masayuki Nishida "Community Disaster Management and Student Disaster Volunteers" "Kancatkanuthokphai doichumchon lae nitshitnaksueksa citasa lae kancatkanphaiphat" in Chulalongkorn University August 14, 2013.

西田 昌之「災害文化創造の試みと課題 タイ国タクワパー郡バーナムケムのコミュニティ防災」『防災における文化の役割 国際防災協力と災害文化の醸成』立教大学アジア地域研究所主催公開シンポジウム 2013 年 5 月 25 日

西田 昌之「復興」その後 2004 年スマトラ沖大地震を事例に 『東北のこれから-「復興」と「支援」を超えた未来のために-』国際基督教大学アジア文化研究所主催シンポジウム、2012 年 12 月 8 日、国際基督教大学

〔その他〕

研究発表企画展示：アート学術融合展『津波の後、語り継ぐもの タイ 9 年日本 3 年』企画代表、主催：日本タイ津波プロジェクト、後援：三鷹市、国際基督教大学アジア文化研究所、開催地：三鷹市芸術文化センター地下階 1F、開催期間：2013 年 12 月 19 日 - 23 日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

西田 昌之 (NISHIDA, Masayuki)

国際基督教大学・アジア文化研究所・研究員  
研究者番号：40636809

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし